

<実践報告>

小学1年生の宿題「現代詩と古典の音読」の学習効果

小林則雄 長野市立南部小学校
土井 進 信州大学教育学部教育科学講座

Learning Effects of the Recitation of Modern Poems and Classics for First Graders

KOBAYASHI Norio: Nanbu Primary School, Nagano City

DOI Susumu: Educational Science, Faculty of Education, Shinshu University

研究の目的	1年生に現代詩や古典の音読を宿題として課することによる学習効果を明らかにする。
キーワード	宿題 音読 現代詩 古典 家族のつながり
実践の目的	音読を毎日の宿題とすることによって、現代詩や古典に親しむとともに、家族とのつながりを密接にする。
実践者名	第一著者と同じ
対象者	長野市立青木島小学校 1年生 (26名)
実践期間	2007年4月～2008年3月
実践研究の方法と経過	入学間もない1年生に毎日宿題を課した。宿題は、A4片面1枚としその裏面に音読用の詩を載せた。現代詩から『論語』、『平家物語』、『百人一首』、『実語教』、『尊徳語録』など幅広いジャンルからの詩を提供した。詩を暗記できたら「音読認定証」にシールを貼り、5作品を暗記するごとに音読認定証3級から順次等級の認定を行った。 保護者の理解と援助も得られ、保護者から子どもに称賛が与えられ、また保護者と子どもの関係がより密接になった。それにより子どもたちが安定した学校生活を送れるようになった。
実践から得られた知見・提言	低学年でも古典に親しむことができることが分かった。音読は声に出して読むことにより、本人および周囲の者との良好な関係を構築する力があることが分かった。新しい学校で3年生を担任することになった。これまでの経験を生かし音読の宿題を課しているが、子どもたちにも好評であり学級も落ち着いている。

1. はじめに一研究の動機と目的—

「のりちゃんの夢航海」と称して、永年勤務した石油精製会社を早期退職し、信州大学教育学部に進学、念願かなって教職に就くことができた。在職中は、地元（静岡県）で清水ヨットスポーツ少年団の運営にも永年関わった。また、その上部団体の役員として日本の代表選手を引率しアジア各国へ監督として転戦した。日本での国際OP級アジア選手権大会の誘致・運営や監督として、いろいろな得難い体験をすることができた。

教職に就いて5年が経った。5年間の経験は、とても得難い体験であった。これまでの人生の中で、これほど苦しみ悩んだこともなかった程の経験もした。その上で、5年目の1年生の担任は至福な体験であった。

その大きな理由の一つに、音読の宿題があったのではないかと考えた。平成19年度の体験を振り返りながら、音読の宿題のもつ学習効果について考察することにしたい。

2. 1年生の担任となる

前任校は、3月末で任期が切れる。次年度の学校についてなかなか決まらない日が続いた。3月になって、やっと長野市立青木島小学校へ転任することが決まった。校長との面談の中で、希望する学年について問われた。それまでの経験から、①高学年の方が、言葉が通じやすい。②これまでの実社会の経験を伝えたい。③低学年は、音楽の授業も見なければならぬ。（音楽は嫌いではない。むしろ好きな方であるが、教える自信があまりなかった。また、音楽で苦い経験があった）などから、低学年、とくに1年生については、避けたいと希望した。

4月2日初出勤当日、校長室で1年3組担任を告げられた。更に校長は、4月1日付で新しい校長となっていた。えらいことになったというのが正直な気持ちであった。

入学式まで、その日を含めて3日しかない。勤務時間中は、スケジュールがいっぱいで、学年主任を始めとして、周囲の先生から学校の様子を聞くのが精一杯の状況であった。

入学式まで何をすることが、一番の関心事であったがいかんせん時間がなさすぎる。とにかく何から手をつけるべきかが、よく理解できなかった。学年主任を始めとして同僚先生の話聞きながら、みんなと同じことをするのがやっとであった。

3. 入学式と学級開き

入学式当日に、担任が発表され子どもたちと対面し学級開きが行われる。入学児童が入場してくる姿を見たのが、子どもたちとの初めての出会いであった。各幼稚園・保育園からの事前の情報では結構やんちゃな子どもが多いとのことであった。式典の間の子どもの動きも注目した。椅子から離れて仮担任から注意を受けるような子どもはいなかった。新入生らしい初々しきで辺りを見回す子どもたち、何かほっとするものがあった。

担任が発表され子どもたちの前に立った時、子どもたちの、その笑顔に何ともいえない安堵感があった。これまで担任したどの学年とも違う嬉しさのようなものを、子どもから

受けた。

教室で保護者を前に、①子どもたちは、21世紀の日本を背負っていく大事な国の宝ものであり、クラスの宝ものである。②学習と同時に子どもといえども社会人として必要なマナーを学んでほしい。③スマートな人間になって欲しい。これは高価なものを身に付けるということではない、など担任としての心意気のようなものを話すことができた。担任から挨拶として、国際信号旗の「UW」を揚げた。これは本船が海上で行き交うとき、相手の船に対して挨拶をする時に掲げる旗流信号だ。「本船より貴船へ、安全なる航海を祈る」という意味である。この一年無事に過ごせますようにという祈りでもある。

三組を練習船と見立てて運営していきたい。担任は、さしずめその船長である。子どもたちは、厳しい訓練を受けるトレーニー（訓練生）と保護者の前で定義した。

一人ひとり名前を呼び握手して入学式に行われた学級開きは、何とか終わった。

4. 子どもたちの様子

初日、お姉さんと一緒に登校してきたが、お母さんが恋しいと泣きじゃくるA子。さっそく抱きかかえて一緒に教室にいった。しばらくすると落ち着いた。我が家の長男がよく泣いていたことを思い出した。

初めての登校も何とか終わり、教室で朝の会を始めようとするところまで来た。またA子、お母さんが恋しくて泣き始めた。だっこして廊下にてた。「赤ちゃんだっこはイヤだ」と泣かれたのにはびっくりした。子育ての経験はあるとはいえ、すでに35年も前の話である。まして女の子の経験はない。いささかあわててしまった。

すぐにお腹の痛くなるB子。一日何回も「先生、おなかがいたい」と保健室に行く。また「〇〇ちゃんが遊んでくれなかった・・・」とか些細な理由でよく泣いた。特に1学期の間は保健室に行くことが多くみられた。

自分の思う通りにならないと「〇〇ちゃんなんか大嫌い！」と叫んで火がついたように泣き叫ぶC子。仲良し3人組を作って遊んでいるのだが、何かの拍子に2人で遊んだりすると、すぐに泣き叫んでいた。下校指導で一緒に下校中、祖母が途中までお迎えに見えた。「おばあちゃんってバカなんだよ。おばあちゃんのバカー」と大声で叫んだ。街中で何ということだ。「だめ。そんなことをいうものではありません」と厳しく叱ったこともあった。D男は、クラスで一番小さい。ランドセルの方が大きいくらいだ。小さいが上級生からは、よく可愛がられた。本人いわく「カッコいいと言われたい」らしいが、周りから「可愛い」と言われるのが不満らしかった。ランドセルの片づけや給食着、体操着の片づけがなかなか出来ない。机の周りには、彼の持ち物が常に散乱していた。

双子の姉弟のC男は、忘れ物名人だ。また、持ち物の整理整頓ができない。教科書やノートは、特段に驚かない。鉛筆、消しゴムを含めて予備品を山ほど用意して対応した。極めつきは、1学期の通知表を教室に置きっぱなしにしてしまった。数日後、保護者が恐縮しながら受け取りにきた。それまでも体操着や給食袋や弁当箱を何度も家に届け

学年会で、宿題を出すことになった。1学期も半ばになったところである。宿題のボリュームは、A4版のプリント1枚。宿題の形式を学年会で検討した。学年主任が以前の学校で使用していたというフォームが提案された。算数と国語が半分づつにわかれたシンプルなものであった。宿題に音読と生活のチェックリスト、保護者と担任のコメント欄があるのが興味を引いた。特に音読を宿題に出すことについては、もとよりそのつもりでいたことから、この宿題フォームには、異論はなかった。若干著者としてのアレンジを行うことにした。

学級開きの時に、「のりちゃんマーク」を書いた。このマークは、子どもたちにも人気であった。キャラクターとしていろんな所に使っていた。当然宿題のプリントのどこかに入れてオリジナリティを出すつもりだ。

6月18日から宿題がスタートした。音読は、教科書の巻頭詩「わかば」である。これは学年共通だ。算数、国語の問題は、各担任がそれぞれ実態に合わせて考えることにした。フォームは、ほぼ同じであったが、内容は、各クラス若干の差異があった。

6. 音読への驚くべき反応

音読の宿題を出して1週間も経ったある日、子どもから「先生、わかば覚えちゃったよ」と言うのではないかな。帰りの会で聞いてみたところかなりの人数の子が手を挙げた。ちなみに何人かに暗唱してもらった。もう完璧に、である。これはすごいことと感心した。

とっさに「覚えた人には、先生からご褒美をあげる」と言ってしまった。音読の宿題をどんどん暗記してくれれば、これほど嬉しいことはない。日本語の語彙も増えるだろうし、作文などにも良い影響を与えるだろう。

7. 音読認定証

音読 認定証

☆☆☆☆☆☆☆☆ ☆☆☆

あなたは、忍准 青木島のりちゃん賞
音読の術で、とってもよい成績をおさめ
したので表彰します。

月	日	月	日	月	日	月	日	月	日

平成19年6月21日

忍准青木島のりちゃん賞
講師 小林 勇

音読 認定証

◎◎◎◎ さま

あなたは、忍准 青木島のりちゃん賞會場の術
初級 と認定します。
まずまずの精進を希望します。

平成19年12月13日
忍准青木島のりちゃん賞
講師 小林 勇

二種類の音読認定証を作った。左の音読認定証は、毎週の宿題の認定で五回分認定する。

五回認定されたら、上記級段の認定証を発行する。いろいろな柄のハガキに作成した。

さっそく音読認定証を作ると約束した。一回限りの認定証ではもったいない。一枚に5つ位のシールでも貼れるようにし、将来的に発展させることができるように考えた。音読認定証には、いささか遊び心とこだわりを持たせた。①賞状の用紙を用いて、ある程度の威厳をもたせる。②発行者は、忍法青木島のりちゃん流 師範 小林則雄とした。さらに師範の印として著者の使用している雅号「松籟海庵」を朱泥を使って押捺し色をつけた。③シールは、子どもの喜びそうな模様のものを用意した。子どもたちは暗唱してくると、音読認定証とシールがもらえることがわかり、にわかになんか元気になった。

8. 昇級する音読認定証

音読認定証にシールが5つ貼られると、3級の音読認定証がもらえる。同時に新しいシールを貼るための認定証も発行される。

音読は、1週間同じ詩歌である。次のステップへいくまで5週間かかる。3級の次をどうするか考えた。2級、1級と順当に上がっていくのもいいが、時間もかかる。ならばと、3級の次は1級とし、その次は初段、2段と昇段していくことにした。

級から段になると、一層子どもたちは喜んだ。空手や剣道を習っている子どもたちから、級の上は段というらしいと、伝わったことも大きい。

当然、この級や段の認定証は、シールを貼る認定証とはデザイン、大きさとも差異をつけた。子どもたちが喜びそうな形を考えた。幸い、面白いポストカードがあったので利用した。

9. 詩歌の選択

教科書の詩は、そんなない。子どもたちが親しめる短くて笑いがあるものを中心に選ぶことにした。それまで何冊かの詩集はもっていたが、あらためて図書館で探した。

著者が読んでも、くすっと笑えるものという基準で探した。いろいろとあるものだ。宿題の裏面に詩歌を載せることにして、それまでの宿題と容量を変えないように注意した。

「おならうた」「ぞう」「たらこかずのこ」や現代詩、「いうてんか」「ぼった」の関西弁の詩や、『論語』、『平家物語』、『吾輩は、猫である。』などの古典。百人一首のかるたとりをやってみたくて、百人一首もいくつか提供した。さらに新聞の書籍広告にあった「二宮尊徳の言葉」の広告からも利用させてもらった。

現代詩は、楽しく笑えるので人気があった。関西弁の詩もなかなか人気があった。意外であったのが『論語』である。子どもたちにとって一番人気は、何とんでも『論語』や『尊徳語録』、『実語教』などであった。

子どもたちの感想は、短くて簡単だからとのことであった。いわばシールがもらえるには、これらは短くて覚えるのに簡単だからというのが、その理由のようであった。

10. 『論語』の効果

『論語』、『実語教』などは、読んでいてリズム感があってとても心地よい。これは子ども大人も同じである。1年生は、些細な理由で、よくトラブルを起こす。それがまた1年生でもある。そんな時に『論語』に登場してもらおう。『論語』①は？せーの「子曰く、それ恕乎。己の欲せざるところは人に施すことなかれ」「どういう意味かわかるよね？」と問いたです。たいがいの場合は、子どもたちも理解し、すんなりと「ごめんなさい」とおさまっていく。

『尊徳語録』も同様である。横入りするような場合、『尊徳語録』を唱和させる。「譲って損はなく、奪って得はない。」「横入りはいけないね。」と諭すのである。いずれもすでに暗記できているから、素直に聞ける良さがある。

11. 保護者の反応

音読の宿題が軌道に乗りかけたころ、産経新聞の投書欄に「拍手が学習に弾みをつける」と題した面白い投書が載った。埼玉の主婦からの投書で、同じように音読の宿題が出されている家庭での話だ。子どもが読み終わった後、必ず家族の誰かが拍手をする。はじめはあまり乗り気でなかった音読の宿題がだんだん好きになっていった。さらに幼稚園の妹までが音読を暗唱し拍手をねだるようになったという内容だ。

さっそく学級だよりで紹介した。C子さんの家庭では、夕食後毎日C子がソファに立って音読をする。そして祖父母やお母さんから拍手をもらう。その様子が宿題の保護者のコメント欄に書いてあった。実に微笑ましい。E男の家では、年中の妹も一緒に唱和する。『論語』をE男より早く覚えたい。E男が認定証をもらって帰ってからは、年中組の妹のH子も、その認定証に触発されて、「のりお先生に発表したい」と母親におねだりしているとのことであった。ある日の放課後、お母さんに連れられて教室にやってきたH子、堂々と『論語』を暗唱した。さっそく特別に音読認定証を作って認定した。もう大喜びで帰っていった。以来、E男よりH子の方が先に宿題を見るようになったとか。

祖父母と同居している家庭では、とくに祖父母の皆さんが興味を示し、子どもにあたたかい声援を送っていたことも分かった。

1年生が、『論語』や『平家物語』など古典を唱和するのは、保護者にとっても驚きであり、また子どもの成長がよく分かる指標でもあったのだろう。

子どもへの声援が自然に生まれ、また家族の間での対話も生まれていると想像できた。担任の前で発表するのが恥ずかしいと、暗唱できるのに来ない子もいた。音読認定証はもらえないが、それはそれでいいとしている子どももいた。

声に出して読むことから、保護者は仕事をしながらでも対応できる。また確実に読んでいることは確認できることから、子どもに対して、明確に称賛の言葉かけができる良さがある。またその言葉かけによって相互の信頼関係の構築も進む。

12. 宿題に対する「お家の方から」のコメント

宿題に対する「お家の方から」のコメントを一部紹介しよう。子どもたちに対する温かい愛情が滲み出ている内容だ。担任としてどれだけ力になったか計り知れない。感謝そのものである。子どもにも読めるようにと、ひらがなのものも数多い。原文のまま。氏名については略した。

- ・かっぱの音読 もっとききたいな。先生のくれるシールをみてみたいな。T君がんばれ！！
- ・おんどくすつごくがんばっているね。おかあさんはとってもうれしいよ♪
- ・いわれなくても、じぶんからしゅくたいをすることができて えらいなあ！！
- ・よくがんばりました。靴をきれいにみんなの分もそろえてくれました。
- ・家に帰ってきたら「論語2」をもうおぼえていてびっくり！意味もよく読んで覚えるといいね！音読頑張ったね。何回も読めば上手にできるね。
- ・音読完璧です。私まで覚えてしまいます。」二人で掛け合いで覚えてみました。夜寝るときにも1人で、口の中で読んでいるようです。
- ・論語の音読がとても楽しいようで、喜んでいきます。改めてきれいな音の言葉をたくさん知ってほしいと思いました。
- ・「また新しい音読だぁ・・・」と覚えるのが楽しさ半分、大変さ半分の様子。
「でも、がんばる」とやる気は満々みたいです。そのやる気ってとてもいい事だと思います。
- ・音読にめざめたのかな！「もうよめるよー」と元気によんでいましたね。せんせいにきいてもらいましょう。
- ・月曜は音読を頑張る日と決めて、やっているようです。がんばってるね。
- ・お姉ちゃんも加わり楽しく音読しています。子どもの頃覚えた詩などは大人になっても覚えているものですよ。明日、先生のところに行くようです。
- ・宿題をしているとき、とっても静かだよ。きょうもしっかりがんばってえらかったよ。
- ・おんどく③ おめでとう！すごくうれしそうに伝えてくれました。「ママもうれしい？」と何度か聞かれました。もちろんうれしいよ。だけど自分が一番嬉しい事忘れるな！！
- ・音読が楽しくなったようで、夜の絵本タイムにSと妹が読みたがるようになり、とても嬉しく感じました。のりお先生に挑戦することが、とても楽しいようで報告してきます。ありがとうございます。
- ・自分から字を読もうとするようになってきました。ひらがなを見つけると読んで喜んでいます。そんな姿がまた可愛かったりするんですよ。
- ・「今日 ろんご②先生のどこにいった？」と聞くと「いっぱいお友達が並んでいけなかった」との事 みんなもがんばっている様子がよく伝わりますね。母
- ・おんどく大きな声で元気よく読めました。Mちゃんが元気よく読んでくれると、家族みんながとっても嬉しい！！

- ・すっごく宿題頑張っています。そして楽しそうにやっている事は、とても良いと思います。親も頑張らなきゃ・・・と元気をもらっています。運動会の招待状もらいました。すごく嬉しかったです。
- ・今日は言われなくても自分でかたづけや明日のしたくができました。おんどく認定証をにこにこしながら、見せてくれました。
- ・音読では「論語②」だけでなく「論語①」もスラスラ聞かせてくれました。シールもらったよ、と2~3日前のことを、うれしそうに報告してくれました。
- ・音読 学校でも頑張ったね。うれしそうに、音読認定証見せてくれました。ママもうれしかったよ。
- ・休み明けに論語②を則雄先生に聞かす事ができると思います。よく頑張りました。

1 3. 子どもの変化

音読だけの効果ではないかもしれないが、2学期になってからはずいぶんと子どもたちが落ち着いてきた。保健室に頻繁に通っていたB子は、だんだんその頻度がへり、とうとう行かなくなった。さらに3学期になって駅伝大会の練習が始まってから、クラスのトップグループに位置し、いっそう自信をもつことができた。行動的になって少し位のことには動ずることなく、笑って過ごせるようになってきた。

C子は、ずいぶんと我儘がへり笑顔が日常的にこぼれるようになってきた。友達とのトラブルも目に見えて減っていった。音読がその改善のすべてという確信はない。ただ宿題に書かれている保護者からのコメントを読む限りでは、保護者と子どもとの関係がより緊密になっていく様子がよく読みとれた。それらが子どもの気持ちを安定させているのではないかと想像できる。

1 4. 実践研究のまとめ

1年間を通じた音読の宿題が、思わぬ学習効果を生んでいることを実感することができた。音読の宿題による学習効果と考えられることは、以下の通りである。

- ①「読は、1年生でも可能である。昔の寺子屋で素読をしたという事例は、事実であると実感できた。
- ②古典といわれるものであっても、1年生は楽々と読みこなすことができる。ルビをふれば十分対応できる。
- ③声に出して読むので、周囲を巻き込むことができる。今回の経験のなかで兄弟姉妹、両親、祖父母と周囲のいろいろな人を巻き込んでいくことが分かった。幼い妹も兄に負けずと音読に挑戦できることが分かった。
- ④言葉に対する関心が高まった。自ら字を読もうとする姿勢が見られるようになった。
- ⑤周囲からの称賛は、子どもに自信と勇気を与える。
- ⑥シールや音読認定証、段級による昇級システムは、本人の実績を明確に示すことがで

きるので、音読を持続させる力になりうる。

15. 今後の課題

この体験を今後の学級経営の中で生かしていきたい。子どもたちが喜んで学校に来ることが、まずは一番大事なことであるからだ。

音読だけがすべてにわたって良い訳ではない。ほかの何かと相まって相乗効果を生んでいるのであろう。他の何かがあるかを、今後の課題として考えでみたい。また、数多く実践されている音読の宿題の比較検討なども課題の一つである。

新しい学校に赴任した平成20年度は、3年生担任となった。ここでもさっそく音読の宿題をスタートさせた。子どもたちの人気の詩歌は、やはり『論語』や『尊徳語録』であった。

文献

- 小池タミ子・上條晴夫編著、1995、『朗読・群読テキスト』民衆社
小池タミ子・上條晴夫編著、1997、『続・朗読・群読テキスト』民衆社
伊藤英治編、高島純・絵、2002、『元気がでる詩 3年生』理論社
『増補国語便覧』、1995、浜島書店
石川佐智子著、2007、『日本の道徳力』(株)コスモトゥーワン 新聞広告
齋藤孝編、2005、『声に出して読みたい日本語⑥』草思社
齋藤孝編、2005、『声に出して読みたい日本語③』草思社
齋藤孝編、2005、『声に出して読みたい日本語⑦』草思社
東 君平著・絵、1995、『ひとくち童話②』フレーベル館
『小一教育技術』、2007、4月号～2008、3月号
小学校教科書国語1上『かざぐるま』、2006、光村図書
阪田寛夫著、絵・和田誠、1977、『サッちゃん』国土社の本
『実語教』 www.j-texts.com/kinsei/jitsu2.html 他多数
増渕恵子著、2007、『拍手が学習に弾みをつける』産経新聞 談話室

(2008年6月30日 受付)